

## 株式会社坂田墨珠堂様 寒糊吹き体験レポート 2019

NPO法人書物研 修復本科：藤井かおり

日時：2019年1月19日(土)

糊吹き 午前10時～午後5時頃

直会：午後5時頃～午後8時頃

場所：株式会社 坂田墨珠堂様（第2工房テラス）

滋賀県大津市小野1 1 4 4 - 1

<http://bokujudo.com/>

坂田墨珠堂様は、1989（平成元）年創業。美術工芸品の保存修理や表装を手掛けておられる工房。

例年、一年間で最も寒いとされる大寒の頃に行われる寒糊吹き。その日に炊いた糊は甕に納められ約10年間保管したのち「古糊」となり、ようやく使用することができる。坂田墨珠堂様では、この日一日で30kgほどの小麦でんぷんを使用し糊を炊き上げる。

寒糊は、工房の伝統と歴史、個性を表すものであるために、通常は工房のスタッフのみで炊き上げ、部外者が立ち入れないことも多い。しかしながら、坂田墨珠堂様では、寒糊吹きや古糊、文化財修理のことを知ってもらう機会になるように、と関係者を招き行事として開催している。今年は60名ほどの参加とのこと。

伝統の糊吹きを体験できるとともに、普段見ることのできない古糊の保管庫も見学することができ、とても貴重な機会となった。

以下、糊吹き作業中や保管庫の見学時に伺った事柄を記載する。

## 工程

- ① 半生状態の小麦でんぷんを一晩水に浸けてしっかりと水分を含ませたのち、余分な水を捨てる。



- ② 水を含んだ小麦でんぷんはしっかりと固いため、木べらで掘り起こすようにすくい、目の細かいふるいで漉しながら「水：小麦でんぷん = 3 : 1」の割合で水に溶かす。



- ③ 水に溶かした小麦でんぷんを火にかけ、かき混ぜながら一時間かけて炊いてゆく。その間、焦げないように絶えずかき混ぜ続ける。ムラなく混ぜるには、木べらよりも麺棒のような形の方が良いとのこと。

〈炊きあがりまでの変化〉

サラサラの状態では色は真っ白 → 急に一気に透明さを帯びて熱が入り出す

→ グレーがかり、どんどん粘度が増し、かき混ぜる手に重さを感じ始める

→ ツヤが出てきて、かき混ぜた時、鍋の縁との間に膜を張るようになったころ仕上がり



- ④ 炊き上がったら甕に移す。坂田墨珠堂さんでは、毎年2つの甕がいっぱいになるまで炊く。今回は、薪とガス火の2箇所各6回ほど炊き上げた。使用した釜は、釜底に残った糊をカンカンに焼いた後に冷水を入れて、底の焦げを剥がして洗浄する。



- ⑤ 糊を入れた甕は木蓋を載せて和紙で目張りをし、年度と参加者の名前を記載した和紙を側面に貼って、地下の保管庫に納められる。



#### 【保管について】

- 地下の保管庫は、通年 5~10℃。珪藻土で作られていて、湿度は常に 60%くらい。
- 糊は微生物によって徐々に分解されてゆく。
- 坂田墨珠堂さんの保管庫には、創業以来 30 年分の古糊のストックがある。
- 保管庫には古糊に必要な菌が住みついている。糊は腐ってはいけませんが、保管の過程でいろいろな菌が繁殖する。

- 毎年、寒糊炊きの日に保管庫内の甕の蓋を開ける。蓋を洗浄して、糊の表面のカビ部分を取り除いて、水を張った後に再び封をする。一年目の糊は、保管ののち数週間でカビが生える。2～3年でカビが減ってくる。5～6年も経つと取り除くほどカビも生えないため水を足すだけで良い場合もあるそう。他の修理工房によっては、蓋を開けないところ、水を入れないところもある、とのこと。坂田墨珠堂さんでは、実験として平成2年に炊いた糊のうち、ひと甕を一度も蓋を開けずに保管している。

#### 【古糊について】

- 江戸時代あたりから使われているようであるが、厳密にはいつから使われていたか分からない。
- 化学者によると保管後8～10年が使い時といわれているが、技術者の実感としては8～12年くらいが安定していて使いやすい。坂田墨珠堂さんでは、1年間にひと甕半ほど使用する。安定しているので、甕から出してもすぐには傷まない。
- 古糊は、クリームチーズ状で糸を引かない。PH4～4.5くらいで酸性。水で洗って沈殿させ、若干PHの酸性値を落としてから使うこともある。胡粉入りの美栖紙や白土入りの紙はアルカリ性なので、それらと使用すると結果的には中和される。
- 中性の古糊が研究されたこともあったが、通常古糊よりもさらに粘着力が弱かった。
- 他の修理工房によっては、ゴロゴロしたポテトサラダ状の糊を好むところもある。古糊と新糊を混ぜる人も、古糊だけを使う人も、新糊を急速劣化させでんぷんの接着力を落とすために冷凍や冷蔵して使う人もいる。工房や使う人によって様々な使い方がある、とのこと。
- 炊きたての新糊を使うと紙がひきつる。ぼそぼそになった状態の糊は紙が縮まないが、古糊はもっと紙が縮まず粘着力も弱い。
- 中国では、熱いお湯に粉状の糊を溶くのでざらっとしており、結果、固い仕上がりになる。
- 以前は、修理工房ごとに徒弟制度があり、古糊は主に若手の仕事で3～4人で炊いていた。一人前になる頃、自分が若い時に炊いた糊を使う事になる。また、暖簾分けの時には、古糊をひと甕もらうこともあったそう。

#### 【古糊の使用について】

- 掛け軸や卷子は何層も裏打紙を重ねるが、古糊を使うことによりしなやかな仕上がりになる。
- 古糊はでんぷんが分解されており接着力が弱いので、紙の繊維をよく絡み合わせるために棕櫚シユロを束ねた打ち刷毛で叩く。打ち刷毛を使用するのは、江戸時代くらいからのよう。
- 新糊は、本紙を支える肌裏打ちに使用するが、絹本か紙本かによって糊の濃さを調整する。特に、掛け軸や卷子装のような巻く形状のものは、2層3層と厚みや強度を持たせる裏打ちを全て新糊で行うと、固い仕上がりになり、巻きグセがついたり、折れが生じる原因になる。
- 昔は、軸装は細巻きのみだったが、現代は、修復後に「太巻添軸」という軸を新調することが多いため掛け軸の巻き径が太くなりグセがつきにくい。そのため、2層くらいまでの裏打ちであれば新糊でも問題ないのかもしれない、と感じるとのこと。

以上